日本人は「天皇制」をどう受け止めてきたか？ 決定的に「欠けていた視点」

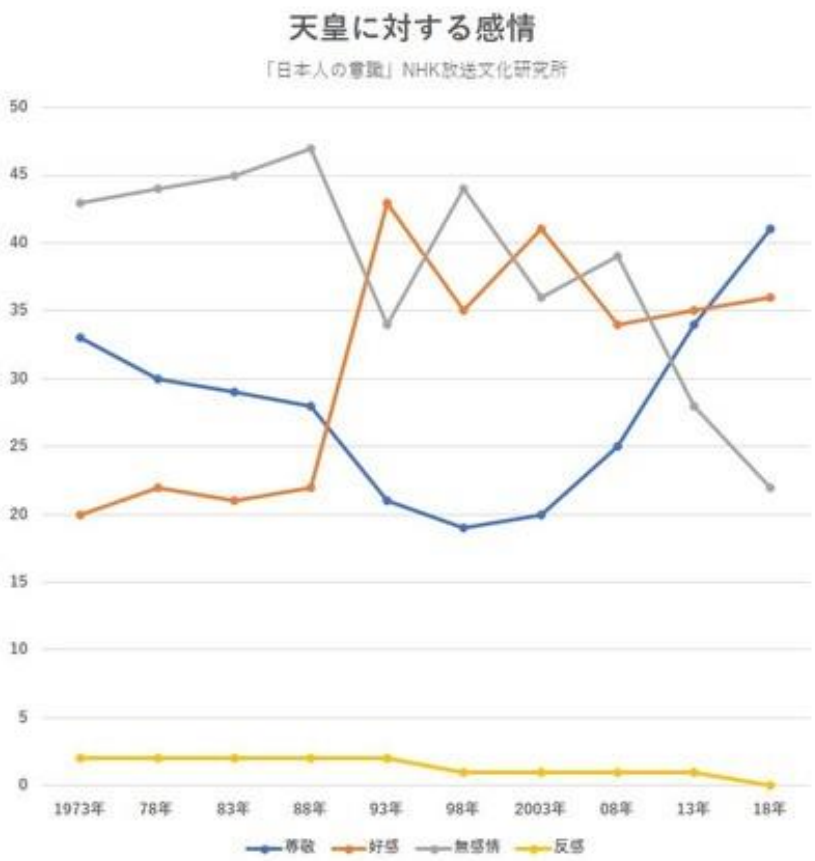
【対談】大澤真幸×木村草太

天皇に対する感情はどう変わってきたか

木村　前半では、『むずかしい天皇制』を読み解くためのキーワードについてお話してきました。

大澤　現代の天皇制を見るためのちょっとした資料を持ってきたので、紹介したいと思います。NHK 放送文化研究所の「日本人の意識」調査です。1973 年から、5 年ごとに行われており、その中に「天皇に対してどのような感情を持っていますか」との設問があります。

88 年と 93 年でグラフの形が大きく変わりますよね。理由ははっきりしていて、昭和天皇から平成の天皇に変わったためです。



拡大画像表示

大澤　昭和天皇の段階では変化に乏しく、細かく見ると「尊敬」が徐々に下がっています。これは戦前から生きていた人たちが、調査があとになればなるほど人口のボリュームとして少なくなっていったためです。

昭和（88 年）と、平成（93 年）の間の推移を見ると、尊敬が下がり、好感が上がります。尊敬する人が少なくなったのは、それまでの尊敬は昭和天皇に向けるものであり、平成の天皇になった瞬間に尊敬する理由がないからでしょう。

面白いのは、「好感」が上がり、「無感情」と答えた人が下がっていることです。ここから推測できることは、昭和における「無感情」とは、昭和天皇に好感を持てない消極的な意味での反感であった、ということです。これが私の仮説です。どうしてそう考えるかというと、このグラフは、昭和における「無感情」が、昭和天皇没後に、「好感」に転じたことを示唆していますよね。

ということは、昭和の「無感情」は、昭和天皇であったがゆえに、あえて「好感」を抑圧していた、ということなのです。つまり昭和天皇ゆえに好感を持ちきれないと思っていた、そのことが「無感情」という回答になっていたのです。昭和と平成の「無感情」は意味の異なったものなのではないでしょうか。平成の「無感情」は、単純に無関心に近い。

木村　昭和天皇についての「無感情」は、**強い関心を持った無感情**であると。

大澤　ええ。だから平成の天皇になった瞬間に急に好感を持つ人が出てくる。天皇そのものに対しては、好感を持ちたがっていったのではないでしょうか。しかし昭和天皇だと思うと持てないと。これは戦争責任の問題とも絡んでくると思います。

そして 10 年以上かかったときに、単なる「好感」を超えて、「尊敬」になっていく。もちろんいわば「リベラル」とも言ってしまえる平成の天皇の行動が――ハンセン病患者たちと交流したり、戦没者の慰霊や被災地の慰問に訪れるなど――ポジティブに見られたこともあります。

日本経済の不調のあらわれ？

大澤　でも僕は、それだけではないと思っています。政治学者の渡辺治さんが、1990 年に出した本の中で、天皇制について面白い指摘をしていました。日本人は、1960 年代はもう少し天皇のことについて気にしていたはずなのに、70 年代、80 年代になると、興味が薄れてきた。なぜなら政治の季節が終わり、経済の季節になったからだと。この説を応用すると、**日本人は経済的に調子が良いと、天皇に興味がなくなる**のです。逆に経済的に不調だと天皇について関心が増える。

ですから、天皇を尊敬している人が増えたのは、天皇個人の行動に尊敬が集まっただけではなく、単に日本経済が不調であることのあらわれなのではないか。日本人が経済的に貧しくなり、自尊心が傷ついた時に、その欠落を補うために天皇が使われているのではないかと思いました。

木村　言われてみるとその通りですね。報道関係者から聞いた話ですが、阪神淡路大震災の直後に、天皇が被災地に足を運んだことに対して、当時はネガティブな反応も多かったようです。「こんな忙しい時に、天皇に来てもらっても困る」と。

しかし東日本大震災の時には、反発するような声はほとんどなかった。それは平成の天皇が人格的に尊敬を集めた面もあるかもしれないですが、単に経済的にうまくいってなかったためであると。

大澤　この調査についてもうひとつ指摘しておきたいのは、天皇に反感を持っている人の少なさです。私の世代の大学生の頃の感覚からすると、「天皇制賛成」と言っている人は周りにほとんどおらず、反対が当たり前でした。今の学生は賛成がデフォルトかもしれませんが。2019 年の毎日新聞が憲法記念日直前にやった調査を見ても、天皇制に反対している人は 7%います。

これは質問の聞き方に問題があると思っています。天皇に対する感情について聞かれているので、「無感情」と答えた人の中に、天皇は個人的に嫌いではないけれど、天皇制には反対だと思っている人がいたのではないでしょうか。

ちなみに、2019 年に行われた「あいちトリエンナーレ」で昭和天皇の肖像画を燃やした映像に批判が集まりましたよね。でも 1970 年の時点でのようなことが起こっても、ひとつの意見としてふつうに受け入れられ、「国民の感情が傷つけられた」などの大きな問題にならなかったと思います。

グローバルな天皇制は想像できない

木村　時代によって天皇の受容は変わってきたと。

今回のコロナ禍を経験し、世界共和国的な連帯、例えば国連や WHO の強化や、ワクチン配分のための国際協力などの重要性がわかったと思います。しかしそれでもなお、世界共和国と世界大戦とを比べた場合、現実感を持つのは、後者であると『新世紀のコミュニズム』で大澤先生は指摘していましたね。こうした中で、天皇制はどのような意味を持つのでしょうか。

大澤　世界共和国も世界大戦も非現実的ですが、世界大戦のほうがより現実的に感じる。コロナ禍を終えて、世界共和国的な方向に向かっていく必要性をみんな感じたにもかかわらずで。

これはもちろん日本だけの問題ではありませんが、**天皇制を考えてみると発想が非常に内向き**ですよね。世界のことなんか考えていません。世界的な流れの中で、天皇制をどう位置づけたらいいのか。

木村　天皇制が内向きであることは考えればわかりますが、あまりそうした観点からは批判されていませんよね。

大澤　一神教の神は、実際に信じている人々の範囲は限定されていたとしても、理念の上では人類全体の神です。だから、人類全体が、その神の宗教共同体に入るべきだというイメージがあります。しかし天皇制は違う。万世一系の天皇がいて、その人は日本人と特別な縁があるということになっているわけですが、人類全体と関係があるとは思えない。グローバルな天皇制なんて誰もあると思っちゃいないし、想像できない。

戦前の天皇制については、「日本」の範囲にフレキシブルなものがあったので、厳密に定義しづらいですが、前近代を含めても、天皇制はある限定された範囲の人たちだけに適応されるものであると自明視されています。それゆえに、天皇をなぜ大切にするのか説明せずに済んできたとも言えます。一神教の神に、異教徒を帰依させたかったら、ちゃんと説明しなければいけませんから。

「国民」の定義と天皇制

木村　そこを踏まえて、**「国民」について考えたい**です。天皇制において「天皇」は具体的な人物を明確に定義できますし、「天皇の意志」も一人の人間の意思なのでわかりやすい。しかし「国民」の定義について考えると、なかなか一筋縄ではいかない概念です。

大澤　政治家はよく「国民のために！」と言いますが、「人民のために！」とはあまり言いませんよね。「国民」の方が日本では好まれていて、自明の概念のようにされていますが、英語でどう訳すのかは難しい。

木村　”people”なのか”nation”なのか。

大澤　日本語の「国民」は、英語とうまく対応していません。日本では、「人民」や「市民」の概念があまり定着していない。

「人民」の概念は、ヨーロッパやアメリカでは、特別な緊張感の中から出てきました。フランス人権宣言”Déclaration des Droits de l’Homme et du Citoyen”は直訳すると「人間と市民の権利の宣言」と言いますが、人間の権利なのか、市民の権利なのかよくわからない。

「人間」と言えば、人間一般の権利ですし、「市民」と言えばフランスの市民権を持っている人の権利になる。人間一般に開こうとする外向きのベクトルと、特定のグループとして収斂しようとする内向きのベクトルの両方がある。両者が葛藤しているのです。

日本語で「国民」が選ばれたのは、内向きに閉じようとする「国」の部分が日本人にとってピンとくるからでしょう。だから日本の国民主権と、天皇制は内向きである点でそりが合うのだと思っています。

木村　「国民」の範囲をどう定義しているのかは重要で、**日本国民の定義に天皇はどのくらい役立っているのか。**

大澤　法的には日本の国籍を取ると「日本人」になりますが、「日本人らしい」と人が言う時には、暗黙のルールをどれだけわかっているのかが重要になってきます。「日本人なら、なんとなく知っている」ことを知っている。明示的には教えられないことを知っていると。

その究極の教えられない部分が天皇ではないでしょうか。一度も正式には教わっていないはずなのに、だけれどもなぜか知っている。総理大臣の悪口を言うことに心理的抵抗はなくても、天皇には気楽に悪口の言えない空気があります。

木村　言うことに覚悟すること自体、天皇の尊厳を認めていますよね。

大澤　ええ。批判する人もいますが、総理大臣と同じように気楽ではないでしょうね。その人が天皇制に賛成か反対かは置いておいて、天皇批判が、普通の批判をしているわけではないことが暗黙のルールになっている。

「尊厳」と「階級」の問題

木村　最近、疑問に思っていることがあります。憲法には「個人の尊厳」という概念がありますよね。ある憲法学者がこれを説明するときに、次のように説明しました。尊厳の概念は前近代からあったが、貴族と平民では尊厳が違っていた。近代においては、貴族が持っていた尊厳が普遍化したのだと。でも日本において、天皇が持つ尊厳性をそのまま国民が持ったと言うことはできないのではないか。どこかズレを感じてしまいます。

大澤　面白い観点ですね。日本にも貴族や公家がいましたが、ヨーロッパ風の貴族が日本にいなかったのはひとつのポイントだと思います。例えば、ヨーロッパでは古代から自由人か奴隷かが重要でしたし、たとえばハンナ・アレントが「階級意識」ということを問題にしたときに念頭においていた強いアイデンティティと関連している階級概念があります。近代化したときに、そういう意味での――つまり「貴族」の尊厳と結びついた――階級

は、ヨーロッパでもなくなったはずなのに、実際には文脈からはずれて継承されて、また近代的な階級に繋がっている。

そのような意味の「階級」は、日本にはないでしょうね。日本で一番有名な公家と言えば藤原家といえるかもしれませんが、彼らがいまだに藤原家であるがゆえに発言力があるわけではありません。皇室だけが残ったとも言えます。

ただ日本における公家の尊厳と天皇の尊厳とは別に定義できないでしょうね。「殿上人」という言葉があるように、公家の偉さは天皇にどれだけ近いのかで決まっていましたから。ですがその感覚が、近代的な尊厳の概念に効いてきますので、なかなかこれは難しい。

木村　天皇の前では、敬いの態度を取るイメージがありますが、天皇の前で取る態度を、他の人の前ではなぜ取らないのか？　この設問は、素朴なようで意外と馬鹿にできないと思いました。

天皇制の中にある内向きなベクトル

木村　私はずっと差別の問題を研究しています。差別の一番強烈な形は、否認、つまりみんなが差別している自覚のない状況です。当たり前すぎることになっていて、そこに差別者がいること自体が認識されていない。

大澤先生は『新世紀のコミュニズム』の中で、「未来の他者との連帯」と書かれています。まさに「未来の他者」は確実にいるのですが、それに配慮しようと誰も思っていない。これは否認された状態で、未来の他者との連帯への壁になっていると思います。これをどうやって乗り越えて行くべきか。前半で差別とアイデンティティの関係についてお話されていましたが、大澤先生は差別についてどのように考えているのでしょうか。

大澤　難しい問題ですね。社会学には「構築主義」という概念があります。ほとんどのリアリティは社会的に構築されたものであると。例えば「国民」も「土地」の概念も自然に生まれたものではなく、社会的に構築されたものだと言うことができます。

差別について考えるとき、社会学では構築主義の影響が大きかった。社会問題は当事者によって構築されているかどうかが重要なのです。例えば、ある社会で、女性だけがある服装をしなければいけない、ブルカを着用しなくてはならない、という規範があるとする。僕らが外から、それは女性への差別だ、社会問題だと思っていても、当事者の女性が差別だと思っていなかったら、社会問題としては構築されていないことになります。

でもこういう理論には限界があります。なぜなら、木村さんが今指摘されたように、差別が最も深刻なのは、その差別が当事者によって構築されていることの意識がない段階なのですから。つまり、当事者によってそうとは認識されていない差別こそが、最も深刻です。

大澤　例えば、管理職に女性がいないことは自明だと思われている時代と、ジェンダー差別だと思われている現在では、今のほうがだいぶ進んでいるわけです。社会問題として認識された時点で半分解決しているとも言えます。構築さえされていない社会問題、認識されていない差別があります。その意味で、僕らは未来の他者を排除していて、差別をしているのだけれど、そんなことを差別とすら思ったことがない。ここに問題意識があります。

天皇制においても、「私たち」の天皇制であることがあまりに自明すぎて、問題として認識されていません。天皇制の中にある内向きなベクトルとは逆の方向に力を発揮していかないと、われわれはコロナによって発見された問題を解決できないし、未来の他者に応答することもできなくなる。少なくとも、**天皇制が持っている機能には、差別問題を克服するようなベクトルはほとんど入っていない**ことを考えなければいけません。

木村　ありがとうございます。そろそろお時間のようです。コロナ禍で時間の感覚が普段と違うことが続いていますが、読書をするにはいい時間感覚でもあると思います。私達の対談本『むずかしい天皇制』や、今日紹介した本をぜひ読んでいただきたいですね。